

「胆道外科における C チューブ法ハンドブック」

藤村 昌樹 編集

帝京大学名誉教授/帝京大学溝口病院外科・内視鏡外科センター常勤客員教授

山 川 達 郎

この度、第一東和会病院院長、滋賀医科大学臨床教授、藤村昌樹博士が『胆道外科における C チューブ法ハンドブック』を刊行されました。藤村昌樹先生は、30 年来の胆道外科のエキスパートであり、また本邦において内視鏡外科手術が日常の臨床に登場してからは、それまでの経験を生かして、内視鏡外科手術を推進され、多大の成果を学会で報告されてきました。私も胆道鏡を開発して、T チューブ瘻孔を介しての遺残結石や肝内結石の治療に情熱を傾けた一時代を経験した関係上、藤村昌樹先生がこのようなご著書を刊行されたことはご同慶にたえません。

今や、総胆管結石の手術も施設によっては 100 % 内視鏡下に行われるようになって、総胆管結石に対する治療戦略は一変しました。しかし小さな創から内視鏡を挿入して拡大した視野の下に精密な手術を行うことができ、かつ低侵襲である内視鏡外科手術の利点を生かすなかで、こ

れまでに培われた総胆管結石の治療に関する基礎的理論は変わるものではありません。今回本著を拝読して思ったことは、C チューブの応用に関しても著者の胆道外科医としての基本的な根拠に基づく考え方がそこに窺われ、高く評価できる名著であると考えます。

内視鏡外科手術の時代を迎えた今も、総胆管結石の治療を考えると大切なことは、昔同様、結石の遺残と再発の問題です。総胆管切開兼結石摘出術、経胆嚢管の結石摘出術に続く T チューブドレナージ術、C チューブドレナージ術や術前・術後乳頭切開術 (EST)、内視鏡的逆行性乳頭バルーン拡張術 (ERBD) などの位置付けを慎重に考える必要があります。すなわち病態に合った治療法を選択する必要がありますが、最近では C チューブを留置することが確実に多くなってきていることを、私も実感として感じています。私にとって C チューブを腹腔鏡下

に留置して問題に思ってきたことは、その固定法でした。固定が甘く、C チューブが自然抜去してしまうことがよくあったからですが、本書では、そういった技術的なことが詳しくきれいな図を示して解説されていますので、勉強になりました。

総胆管結石の治療は実に奥が深いものがあります。藤村昌樹先生は、胆道外科に永く携わり、磨いてこられた理論の上にたって、C チューブ留置法手技を確立されました。本書は、これから内視鏡外科手術を志す外科医には必見の教材であるばかりでなく、総胆管結石の内視鏡外科手術を日常、頻繁に行っておられる内視鏡外科医にも、大変、見て役に立つハンドブックであると思いました。ここにご推薦申し上げる次第です。

● B5 頁 128 2005 定価 6,300 円
(本体 6,000 円 + 税 5 %)

—医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)